

相次ぐ大発見 奈良時代の神社跡

青木遺跡（出雲市東林木町）調査年：2002・03（平成14・15）年

松尾充晶

埋文センターが発掘調査した中で、新聞の一面記事になるような報道発表がこれほど相次いだ遺跡は他に無いでしょう。主な発表事項として、①最古段階の四隅突出型墳丘墓を発見、②県内初の近畿式銅鐸が出土、③全国最古級の神像が出土、④国内初の売田券木簡が出土、などがあげられます。これらはいずれも報道で大きく取り上げられ、全国的に注目を集めました。このように多彩な青木遺跡の調査成果のなかで、私が最も重要だと思うのは、奈良時代の神社の姿がはっきりと明らかになったこと、です。

『出雲国風土記』の記載から、当時の出雲国には399もの神社があったことが読み取れますが、その実態は全く不明で、「発掘調査で古代の神社が見つからないのは、遺構として痕跡を残すような形態ではないからだろう」「樹林や滝、泉、岩のような自然物を神社と呼んだのではないか」などと考えられていました。ところが青木遺跡の調査では、地下2mから石を敷き並べた基壇や、建物・塀の柱材などが次々と姿を現し、大社造と似た構造の複数の社殿から構成される、奈良時代の神社の姿が詳細に明らかになったのです。全国的にみても神社遺跡の調査事例は極めて少なく、青木遺跡は古代神社遺跡の代表例ということができます。

平安時代初めに一帯が急激に湿地化したために、遺跡全体がパックされるように埋まっていたことも幸いしました。普通の遺跡であれば土中で分解されてしまう柱材や木製品なども、朽ちること無く保存されていたのです。

特に、文字が書かれた木簡86点・墨書土器1,105点



土中に残されていた神社社殿の柱材

の出土は重要で、これらから、青木遺跡が「伊努社」「美談社」「縣社」という神社のまとまりであったこと、周辺の人々が物資（出挙利稲）を持ち寄ることによって運営されていたこと、春秋の農耕に関連する神祭りに人々が集って盛大に飲食していたこと、などが明らかになりました。やや専門的で意義がわかりづらいかもしれませんが、古代の地域社会における神社の役割を、これほど明快に示す遺跡は他にありません。調査当時、青木遺跡を主題にした学会がたびたび開かれ、全国の古代史研究者がひっきりなしに発掘現場へ来訪されたことを覚えています。

現在、青木遺跡の調査地は埋め戻されて道路（国道 431 号バイパス）となっていますが、その敷地内に遺跡の解説板が立ち、一部の遺構が復元されています。北山山系の山並みを背後に、目の前には水田が広がる景観は古代と変わらないはずです。いちど現地を訪ねてみてはいかがでしょうか。

（島根県古代文化センター 専門研究員）



遺構から復元した青木遺跡の神社の姿